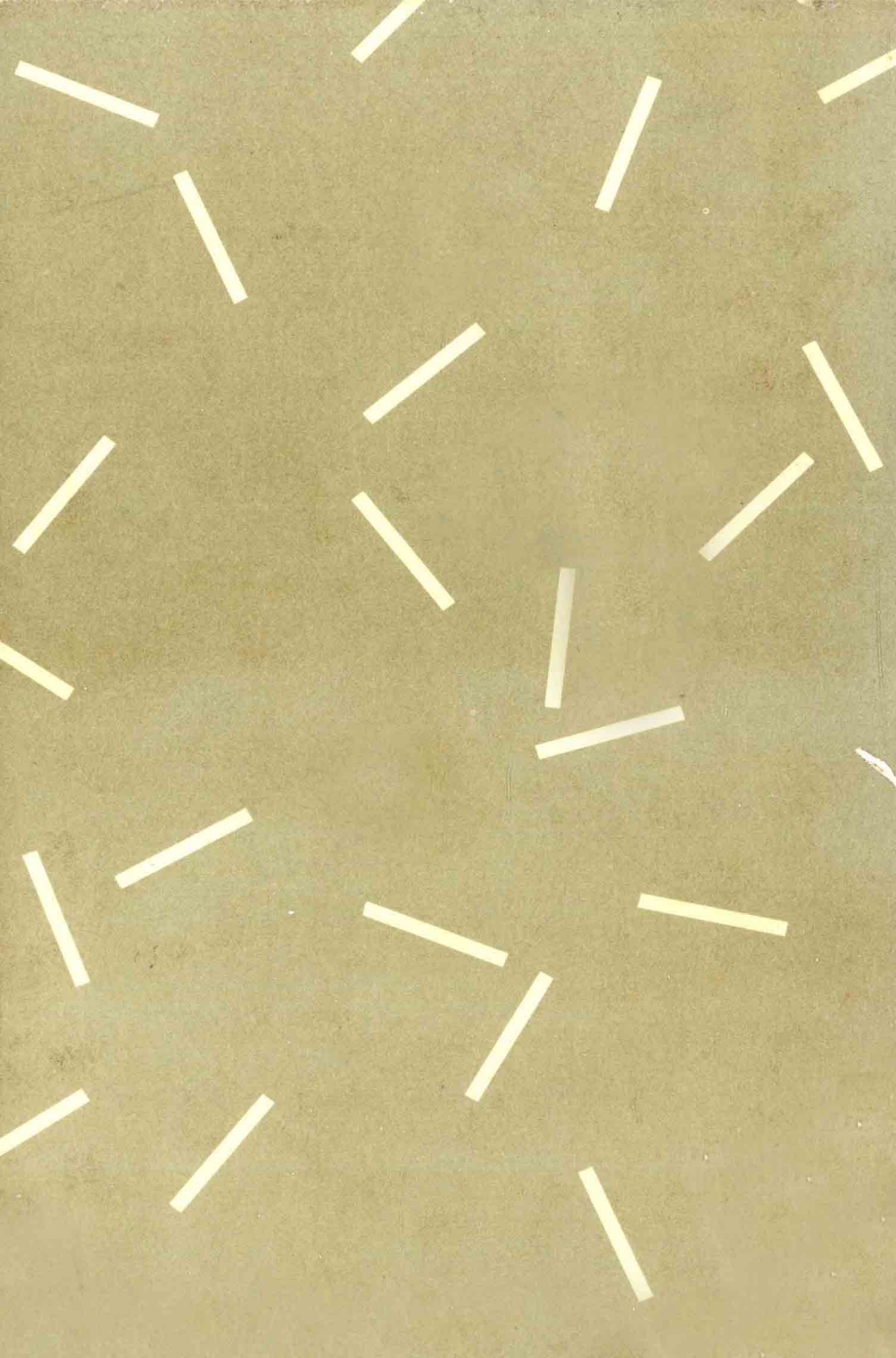




フェアリー akemi hotta 堀田あけみ ガール



フェアリーガール

昭和六十一年十月二十日 初版印刷
昭和六十一年十月三十日 初版発行

著 者 堀田あけみ

装幀者 菊地信義

カバー版画 樋口千登世

発行者 清水 勝

発行所 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

編集 〇三―四〇四―八六一

電話 営業 〇三―四〇四―一二〇

振替口座(東京) 〇一〇八〇二

印刷 暁印刷株式会社

製本 小高製本工業株式会社

© 1986 Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません
ISBN4-309-00445-8

堀田あけみ
本名・堀田朱美。
昭和三十九年愛知県生まれ。
県立中村高校をへて名古屋
大学教育学部在学中。
「1980 アイコ 十六歳」で
昭和五十六年度文藝賞受賞。
著書に『1980 アイコ 十
六歳』『やぐら日記』『あ・
た・し天気になあれ』『と
りあえずフツ―の女の子講
座』がある。

フ
エ
ア
リ
ー
ガ
ー
ル

(1)

「お父さん、お母さんへ

お元気ですか。そろそろ夏休みですが、私はそちらへは帰らないかもしれません。ちよつと、こちらで夏休み一杯バイトをする予定なのです。

新聞で読んだかもしれませんが、名古屋でこの夏に映画を撮るそうで、その映画の仕事に、了おじさんの事務所がかかわっているのだそうです。了おじさんの所なら安心だからと、ずっとそこでバイトをしているのは知っての通りですが、ついでに夏一杯、この映画に関する雑用をやってくれんかと言われて、こっちに来てずっとお世話になってることだし、つい引き受けてしまいました。了おじさんも、お父さんに電話して、「陽ちゃん借りるで、悪いな」と言うつもりだと言ってみえました。もう電話がいったかもしれません。私は元気で頑張っています。みっちゃんにもよろしく。

両親に手紙を書くことなど、初めてである。普段、何気なくしゃべっている相手なのに、いざ文章になると、どのようにしたものか困る。大学に入って、名古屋へ出てきてからも、いつも電話で話していたから、今まで、手紙を書くことなど思いも寄らなかった相手である。

「あんた、手紙書きだよ。電話代だって、そう安ないだらあ。最近の子は、文書くのが下手だっちゅうに、そういう練習にもなるで、こう電話かけてくるだったら、手紙にしたらどうだね。」

そう言ったのは母である。陽の出身地は愛知県の東部で、そんなに名古屋から遠いわけではないのだが、ついつい電話をかけてしまうと、結構料金がかさむ。

友達へのちょっとした伝言や、文通のときの、イマッぽい、いい加減な文以外の文章を書くことは、案外と難しいことがわかった。読みかえしてみても、しっくりこない表現があちこちにある。封をして六十円切手を貼りながら、

「ハガキに書ける長さだったな……。」
と呟いた。

大学に入ると、皆がバイトを捜し始める。陽の友人のバイトには、家庭教師が圧倒

的に多い。陽にも、下宿の近くにある父のいとこの家から、およびがかかった。

だけど、陽は家庭教師は嫌いだ。

だから、丁重に辞退させていただいた。辞退された奥さんは、実に意外そうな顔をした。

「だって、学生さん達、あんなに一生懸命、家庭教師のアルバイト捜しとらっせるがね。なんで嫌なの。他んところはアルバイト代、もっと出すかね。」

「私、ちょっと、家庭教師って性に合わないんです。あの、友達でバイト捜しとる人間は、おっしゃる通り、よけおりますで、なんなら紹介します。」

そう言ったら、奥さんは途端に御機嫌になった。そして、できたらハンサムな男子学生で数学の得意な優秀な学生を連れてきてくれとか言い出した。後日、陽が紹介した奴は、いたく気に入られたらしく、毎週二回、その家で夕食をとっているらしい。

陽は、その代わりに、父の弟である了のところへバイトを始めた。陽とも話の合う若い叔父は、名古屋でイベントプロダクションというものを経営している。ありとあらゆる種類のイベントの請負い屋で、陽のした仕事だけでも、有名なミュージシャンのコンサートの裏方から、出店のみたらし売りまで、種々雑多なものがあった。了を訪ねて、バイトを頼んだときは、了も、同じことを言ったものだ。

「なんで、おまえ、家庭教師やらのだ？」

「嫌いだもん。」

陽は、あつまり答えた。

「うちは、バイト料安いぞ。家庭教師とは較べものにならんぞ。家庭教師なら、世間体はええし、金が入るし、ええ加減にでもできるし、お茶の一つも出るし。こんなええバイト、なんでやらんだ。おまえのことと思うと、うちのより、あっちのバイトを勧めるぞ。」

了の態度は、言葉とはうらはらに、天晴、よくぞこっちを選んだものだという気持ちが見え見えである。よく言うよ、と思いつながら、陽は問われたことに答える。

「だって、どんなふうにしたって金が入るバイトなんて面白ないし、子供に家庭教師みたい、いらんと思うもん。やりたい勉強を自分の好きなようにやりやいいし、わかんないとこあれば、先生にききやいいじゃん。だいたい、学校であんだけ勉強したらさ、ちいたあ他のことしたって罰あたらんよ。とにかく、あんなやり甲斐のないことは、たとえどんだけ金になっても、やらん。」

「おまえ、正直過ぎると、生意気だって言われるぞ。」

「おじさんは、そんなつまらんこと言わんだらあ。だから、おじさんに言ったんじゃない。お婆さんには、ちゃんとうまいこと言って断ったよ。こんなこと言つとれせんよ。」

「そこまで言われたら、しっかり面倒見んわけには行かんな。」

そんな具合に始めたバイトは、確かに、拘束時間や作業量の割にはバイト料が安く、

周りの家庭教師連中のように、収入を得られない。しかし、陽は酒もほどほど煙草もたしなまないことが大きな助けとなって、なんとかやっていけた。それよりも、バイトを通じて様々な人と知り合えて、陽はそれが嬉しかった。部屋の中で、子供の相手をしていたのでは、広がらない世界が広がったことが楽しかった。

ある日、その事務所の予定表と自分のスケジュールを並べて、今度は何ができるかな、と考えていると、了が声をかけてきた。

「陽ちゃん、面白い仕事やらんか。」

こういう誘いには、陽はまず、

「やりたい！」

と答える。それから、

「何の仕事？」

ときくのだ。今日の了は、いつもよりずっと機嫌の良い顔をしている。

「映画の手伝い。」

「どういう映画？」

陽は、たいして期待しなかった。どうせ、キャンペーンか自主製作の、気負いに中身がついてこないものだろう。了は、にやにやして陽にきいた。

「どんなんだと思う？」

「どっかのホテルでテレビに入れとく、ホテル内のレストラン及び市内の観光名所の御紹介。」

「青春ドラマだて。」

了が嬉しそうに言っても、陽は、まだ予定表を睨みながら、

「自主製作の？　なんで、そんなの手伝うの。」

了の口調が、やや、じれったそうになってきた。

「わかつとらんなあ。ちゃんとした全国ネットの映画だて、こういう言い方、あるかどうかは知らんけどな。東京からスタッフがよけおいでるぞ。大きな会社ではないけど、なんか、音楽関係の会社なんだけど、そこが名古屋で青春映画とるんでな、その手伝い。」

陽は、やっと予定表を手放すと、正面から叔父を見つめた。

「おっしゃつとること、よくわかりまっしえん。なんで名古屋でそんなことすんの。

わざわざ名古屋で。嘘つくと舌抜くよ。」

「ゲージッだろ。使い古された東京や大阪では出せん味を名古屋で出す。ま、考えといてることは、ようわからんけど、とにかく名古屋のイメージアップには、なるでな。名古屋の為に、一肌脱いだるがや。」

「極端に郷土愛が強いな。」

「若いくせに、妙に冷めとるのが気に入らんが、仕事はするだろ。今、やりたいって

言ったし。」

「するけど、どんなことすんの。」

「ま、雑用だな。」

「ふうん。」

「悲しき十六歳」という、オールディーズをそのままタイトルと主題歌にいただいた映画が、思っていたほどマイナーではないことに陽が気付いたのは、了のマガジンラックから、結構メジャーな男性誌を抜きとって、暇つぶしに、ばらばらとめくっていたときだった。

君がヒーロー　あの娘がヒロイン

映画主演者　一般公募

キミは、この夏ナニをする？

サーフィン、ハント、サイクリング……

そんなのは、もう古い！

夏休みは俳優として過ごすもの

これっきゃないね！

などという華々しい文句で、「十三歳から十八歳までの健康な男女で、名古屋ロケに参加できる方」を募集していたのが、この映画だったのである。

このオーディションは人が集まるな、と陽は思った。名古屋でこういうことは珍しい。そのうえ、愛知県は人口の少ない県ではない。「名古屋でロケ」を大きく出されたら、好奇心や冷やかしゃ、「もしかしたら」の希望を賭けて、東海地方の中・高生の相当数が、軽い気持ちで応募するのではないか。

「おい、明日の朝な、七時から来れるか。」

これが、陽の、この映画に関する第一号の仕事である。

陽の通う大学の近くには、大学も高校も多く、当然ながら小・中学校もある。その最寄りの地下鉄の駅の出入り口で、ビラを配ってから学校へ行け、というものだ。配るだけではなく、捨てられて落ちているビラも、できるだけ拾うことになっているのだが、陽が一時限めの授業に遅れると渋ったら、これは、同じ所でビラを配る、もう一人の男の子が一人でしてくれることになった。いかにも、軽い感じのする大学生で、「いいよ、気にせんといて。俺、どうも、学校が嫌いださあ。」

とか言って、引き受けてくれた。

大きな赤字で、

「夏のスクリーン 主役は君だ！」

と書かれたビラは、嫌でも目につくし、

「おはようございまーす、お願いしまーす。」

の決まり文句だけではなく、

「おはようございまーす、オーディションの御案内でーす、どうぞー。」

と、「映画のオーディション」であることを強調して配るようにとのお達しを忠実に守ったせいとか、いつも、そのあたりで配られている、新しく開いた店や、政治・宗教団体のビラほど、無惨な扱いは受けなかった。つまり、手からもぎ取るようにして受け取ったかと思うと、そのままホイと捨ててしまう人が少なかったのである。それどころか、三人組の女子高生に二枚渡したら、一人がわざわざ、

「もう一枚、いただけますかあ。」

と戻ってきたりした。

予定より早く配り終えて、学校へ行くと、講義室の中でも、数人がそのビラを話題にしていた。

「あ、陽、来た。よっ、今朝はぐるーさん。」

友人を見つけて隣に席を占めると、一団のうち一人が、ビラをひらひらと揺らした。「これさ、応募してみよっかって、言っとったんだよ。まだ十八歳の子、多いもん。」
「年なんて、サバよんだっていいとさ。高校生に見えたら、本当の年バレても、採用

することあると。」

陽は、了が言っていたことを繰り返す。

「さっすがあ、通じてる！」

「でもさ、関係者としては、冷やかしは迷惑だとか。」

「ううん、沢山の人が応募した方が、話題になっていいから、そういう人、大歓迎だつて。」

また、陽は叔父の言っていたことを繰り返した。

大学生がこうなら、高校生あたりは、もっとすごかるうな、と陽は考えた。

「やだよ、それだけはせえへんわっ！ 勘弁してよお。やあだっ！」

陽が両手でやっとな押し返したダンボール箱を、了は片手で、ついつと陽の前に戻した。

「忙しいときに、わがまま言うだないわ。金、払ってもらって働いとるだで、言われたことは、ちゃんとやりやあ。」

了も、いつもの朗かな調子ではなく、今にも本気で怒りそうである。しかし、陽は負けずに、ダンボール箱を力一杯押し返した。

「他の仕事やるで、二倍でも三倍でもやるで、これはやれんて、なあ、他の人にやつてもらつてえ。」

「他のバイト連中は、みんな、文句言うどころか喜んでやっとなるがや。なんで、こんな簡単なことができた。」

了は、ダンボール箱一杯に詰まった封筒の中から、一通をとり出すと、その中に入っていたものをみな、机の上にあけた。

「履歴書は、まだ見んでええわ。写真見て、二次に残すのと残さんのと分けりゃええだけだがや。何が難しい。好きな顔はこっち、嫌いな顔はこっち、わかったな。」

「そんな、人の一生に関ること決めるの、やーっ！ もっと他の、目の肥えた人がやりゃええじゃん。」

「聞いとらん、聞いとらん。」

了は、そのまま出て行った。陽はふくれっ面で腕組みをすると、目の前の封筒の山を睨みつけた。机の上に了が広げて行った写真を見て、もう一度、封筒の山に目を戻し、了が出て行ったドアを見つめて、大きくあっかんべーをした。

「早くやっちゃわんと、帰れんよ。」

社員のえり子が声をかけた。

「だってえ……。」

まだ、腕組みを解こうとしない陽の顔を、ぼんぼん叩いて笑う。

「血なのかなあ。陽ちゃんと社長って、相当、性格似とるんじゃない？」

「あんな、頑固じじいに似とったら、迷惑だわ！」

「陽ちゃんだって、相当頑固なのに。まあ、早くやっちゃいなさい。下の店でジュースとったげるから。何がいい？」

陽は、腕組みしたまま机の上に突っ伏して呻った。

「やめてえよお、そういうふうに、小学生か何かみたいに扱うのお。」

「そう扱われなくなったら、そう扱われんだけの態度見せなさい。こういうことは、ちゃんと割り切らな。」

「あたしみたいなのが選んだら、悪いよお。」

「どっちみち、何万人の中から、たった一人だけ、主役を選ばなきゃいけないんだから、もともとむごいことなんだわ、オーディションてのは。ここで、陽ちゃんの好みで落とされた子は、運の無い子。そんな運の無い子が、何万分之一になれるわけはないの。その子が選ばれなかったら、別の子が選ばれて幸福になるんだから、いいじゃない。」

陽にだって、理屈はわかる。でも、どこかが心にひっかかるのだ。しかし、ここは陽が頑張り通せる場所ではない。陽は観念して、一束の封筒をどきと目の前に置くと、写真を取り出して、二つに分け始めた。了が最初に広げて行った写真が目止まる。男の子だ。整った顔をしているが、人形のような雰囲気で、陽にはなんだか気に入らない。

（ほーら、格好良い子なのに。嫌いな顔に入れたるぞっ！）